特別
412
3670
2

半ケシ

はるハ春遊よへてよ夜ハ夜を

専とし後宮乃うちハ三千人

下　六九

三千於寵愛一身ありあわかく

六九ト一　ト二

たくひなき太液の花芙蓉乃

く比なかきうへて未央の柳於

下百

ちりゝもなし　咲すハくと

うー紅葉乃露於霜もいりなきせ

チ12
3670
2

<2017-1299>

上音

心にくし秋の声乃ぐ末お

まのにきもおかろまて雲井ふ

路ふうわりきも我しとてふや

なまなわつる霞乃うち秋の末桜

ひとへにおもしき袖う眼ぐく

三羽

ゆうふ巻やしや八葉のことの人

三羽

みきやあ宮中志にまのわもの

きひそ心をすまにおわかしふ

ミりし乃そとまる哉これい

さもみきな成老人なわろも

三羽

ぬいゆのなるものう これい

伯父乃満时ま鐘船といひし老

なわしの及身うあそぬしと哉

あけさき玉靖まて歌をおくる哉

月ばかりふかくあはれをもよ
ほすりうわ　実さきをやし
なすわきまへ　ぬるのうちふかきめ
ぶかくさうぶ　大臣殿をもこころい
ぬのたあぶ　ちくふまきるう
実よく志ろ　めされうわ　殿宮
ろこの孫　をもはるよりうふ

きうおせりのかくきるの
野蔓　ぬるのやまふぬ
たりうくてきとくぬるをめ
中面志ろ　いぬ体乃ぬる鏡を
はぬ松よ立置竹へいうなるん
こ　　上ぬ月と　　直きうくや
鏡を取さんと
　　
あきく我過力を於うぬ

下 楊柳乃たなおあさそふ風を

下 志をれめんとやもあへはそ於ろ

清りし於本ふ先まくわぐ

ゆうかきひとはいはれしの墨

ほのくらこ夕もおほろ月影お

晴ぬ心はいつなるらむきのうや

衣をとわ枕をこすへききちるも

なく若き心よをぞ愛うぬなが海乃

露は名残かなしさはあはれしや

うはるりうはるもおなまうい

かく若きをあらはまふかとも力を

そへてゆめしての数ふすも

あきれひきふすや翠黛蓬

とわくりふそし於なふも

うきなみや花の御所世ふ
たくひあきぞうの船宴や東面の
風よきとうふ海棠乃旅ふまは
きたのしるくなわ　志うるふ
四皇業花をきそめよをたもち
きをおもむ紙ふゆへたくひ
なきひよう歎くをこめて

年月乃衣賀乃若乃こと
目たかく起出の船まの浦わしとも
歌くふ船ふうこなむ中乃紙と
乃うまこうたしや世中い思そぬ
きりりを四乃月の新の舞楽こと
まふひ歳を流うこもなく秘世
ゆくを面一四えた巻ふくとふ

冬の夜や此契りを天も地久しくて
清く脉時もめでまし　実と思ひ
あしらわばを人乃為乃しるしを
明主鏡をとわいたしは清枕に
手く八象のなわ　霜路も川とも
忘るる夜しと月泥雲窓一同ふ
明主鏡を取出し清枕ちうきさ

見きちやうふそえてまう
をききわけきうくて昔り
雲おあしくたよふうきこ
泣しくての恋もよ流折着よ
うきちや鏡のそうちよ尾神乃
海うう清見ある九花乃帳を
夜し乃光そくば清きのくうに

まわたをくはとわさく
あをそめやさこよりふを気色
鏡よりはわへくを雪はいはつかハ
見を面はんあはてあハい病鬼と
乃ゆさと初を授て点給へハ
天ふあうわ地よまるとわ恵ハ
自を分して法つりむひ

いうを鉄ふをを初をふわあ巻
きわ物へいは殿乃程よを温て
すうこもへくはうをよくわ
すきやくもは宮ハて言中
ひわかくやきて明動ハるこう
ハうろはき　抜是い武徳年
中よ婚宮きく神祇大臣

ここに、一詞
魂霊なれ和もは君霊妻志行ふ
老姫のやまふをたいうんと
通力をもたてやう場をうひ面西
天形星主我初沙鬼と秘文を沼
弱よ栄しこくうけたて
家内きわ　悪鬼いう神をうう
まわもぐ寄きはまのき柱る

ここに、一詞
御霊なれ初もは君霊妻志行ふ
形星ふら利初をひはさけ被城
のさうの主鏡よむうひ竹へ
鬼神乃海い沼も方　鬼神い
通力自主もうをてぐおきは
まのろひはり星出る城逃はめ
ゆへい内殿をとひおわ白言乃

玉楮の庭あかう成乃かさし抱
生と引おろし利数をふわあ半
伊ちくよきわたり庭上に
あけすて色よ光地も色貿於は
君乃恵をあふきせ於神となる
垂しと玉鉾を辞志まゞくて
深い葵とうなわよ久盛